

第7章 総括

本書では庄・蔵本遺跡の第24～26・28・29次調査の報告を行った。以下に時代ごとの主な調査成果をまとめ総括としたい。

第1節 弥生時代

1. 前期中葉

(1) 水田

時期 第2・5章で層位および出土遺物の検討を行った結果、第24・28次調査で検出された水田の所属時期は、ともに弥生時代前期中葉(I-2様式)に位置づけられる可能性が高いことがわかった。

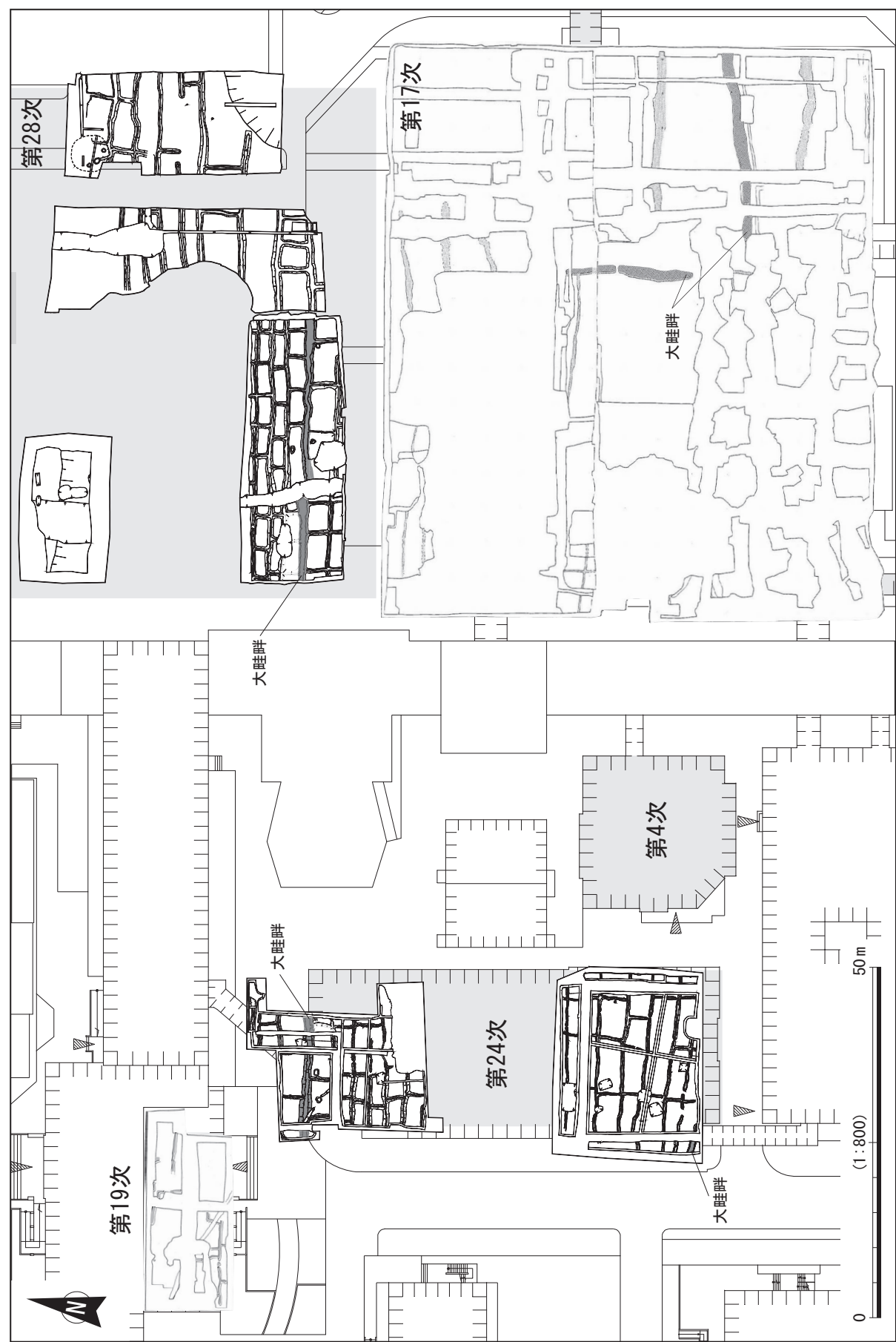
周辺の地形 庄・蔵本遺跡は、鮎喰川右岸の扇状地に位置し、南側は眉山を背にする(第1図)。本遺跡や名東遺跡周辺で検出された旧河道は、鮎喰川の旧分流の一部と考えられている。また弥生時代初頭の居住域は、これらの旧分流の中州か眉山北麓斜面に立地したと想定されている(古田1996・2005)。本遺跡は、概ね南西から北東に向けて緩やかに標高が低くなる傾向があり、実際には微高地や谷状地形などの微細な起伏を有する。水田や用水路はこういった地形を利用し造成されている。

水田域 本遺跡で水田が確認された地点を第112図に示した。本書で報告した第24・28次調査のほか、第17次調査(中村2000b)と第19次調査(中村2009)においても前期中葉と考えられる水田が検出されている。なお、第4次調査では水田は検出されていないが、本来は存在した可能性がある(中村編2010)。以上より、本遺跡では少なくとも4地点において前期中葉と考えられる水田が確認され、水田域は遺跡東半の中央付近に広がっていたことが明らかになった。さらに、東側に隣接する南蔵本遺跡では、前期中葉～前期末・中期初頭の水田が検出されており(近藤編2014)、ここまで水田域が広がることがわかっている。

また、検出された水田面やその周囲の標高をみると、第24次調査地点では、水田面は南側(標高1.80～1.85m)から北側(標高1.55～1.60m)に向け緩やかに低くなる傾向がみられる。一方、第28次調査地点では北西隅の微高地(標高1.80m)の南に接し谷状地形(標高1.50m)が検出され、そこから南東隅の自然落ち込み(上端の標高1.10m、下端の標高0.30m)に向け緩やかに傾斜する。仮に、検出された水田面の標高が、機能時の標高をある程度とどめているとすれば、水田への給水経路を復元する手がかりとなる。

畦畔 第24・28次調査の水田は小区画水田に分類される。区画の形態は東西方向を長辺とした長方形のものがもっとも多く、正方形に近いものも含まれる。区画の面積は4～29㎡程度の幅があり、なかでも10～14㎡のものが多くみられた。とくに第24次調査では、水田面が南から北に傾斜し、標高が低い北側では、南側に比べ水田区画の面積が小さい傾向にあることがわかった。

さらに、大畦畔を検出することができた点は特筆される。第24次調査北区と第28次調査B区の



第112図 庄・蔵本遺跡の水田域

高い。両地点の溝は本遺跡北西部に位置し、底面の標高や周辺の地形からみると、ともに南西から北東への水流が想定される。これらの溝は数条が隣接して並行にのびる点からも用水路としての機能が推定される。水の供給先は、第28次調査の水田や、未調査である本遺跡北東部が想定され、今後当該域において水田や畠が検出される可能性があるだろう。

(3) 出土遺物

第28次調査では、水田面と同様に暗褐色粘質土層上面から自然落ち込みが検出され、その埋土下層（2層）から炭化鱗茎付着土器（第66図-11）が出土している。胴部片であるため、土器自体からその時期を判断することはできない。しかし、埋土上層（1層）に突帯文・遠賀川併行期～前期中葉の土器（第66図-13）が含まれる点から、炭化鱗茎付着土器もこれに近い時期の所産と考えられる。これまで縄文時代の炭化鱗茎付着土器は知られていたが（佐々木 2014）、弥生時代の事例は初であり、当時の食生活を知るうえで重要な資料といえよう。現在、炭化鱗茎の同定および年代測定を実施しており、別稿で結果を報告する予定である。また、同地点出土では、刃部に光沢面が観察される粗製剥片石器（第64図-1）が出土しており、イネ・アワ・キビなどの植物栽培との関連性が注目される。

2. 前期末・中期初頭

弥生時代前期末・中期初頭に位置づけられる可能性がある遺構として、第29次調査の溝1001があげられる。また、同地点の洪水起源砂層である7層から前期末・中期初頭の土器、同じく洪水起源砂層にあたる6層からは、朝鮮半島の円形粘土帯土器の影響を受けたと考えられる土器（第109図-32）が出土している。

3. 後期・終末期

弥生時代後期から終末期に位置づけられる明確な遺構は検出されていないが、第26次調査の旧河道1などで当該期の土器（第42図）が出土している。

第2節 古墳時代以降

1. 古墳時代

第26次調査で井戸が1基（井戸1）検出されている。著しい湧水のため埋土を完掘することは不可能であったが、井戸のなかほどから、古墳時代前期前半の布留0～1式期に相当するほぼ完形の甕（第46図-24）が出土している。井戸の廃棄に伴う祭祀の痕跡の可能性はある。

ほかに、第29次調査の土坑1004から布留2式期前後の壺（第95図-15）、溝1003から弥生時代後期～古墳時代前期に位置づけられる柳葉形の鉄鏃（第88図-6）、第26次調査の旧河道1から6

世紀代の須恵器数点（第43図）が出土している。

2. 古代・中世

第29次調査では古代の掘立柱建物を検出した。調査地点の隅で検出されたため、本来の桁行と梁行は不明であるが、現状で3×1間が残存する。柱穴の掘方は長径0.8m程度の円形または隅丸方形で、直径10～20cm程度柱痕がみられる。埋土からは8世紀代の須恵器（第102図）が出土しており、掘立柱建物も同時期の所産と考えられる。既往の調査では、第6次調査（北條編1998）で同時期の掘立柱建物が2棟、第2次調査（定森・中村編2005）で古代から中世にかけての掘立柱建物が2棟検出されている。ほかに、第25次調査では、包含層から9～10世紀代の土師器が出土しており、黒色土器や赤色顔料が塗布されたものが含まれる（第31図）。これらの遺構・遺物の検討を通じ、古代郡衙の実態解明が課題となろう。

本書報告地点では、中世に位置づけられる遺構・遺物はみられなかった。

3. 近世・近現代

第29次調査で近世と考えられる溝23が検出され、埋土から砥石と鉄釘（第111図）が出土している。ほかに、第26次調査の攪乱や第28次調査の表土・攪乱において、近世の肥前系磁器、瀬戸美濃系陶器、大谷焼燈明具、備前焼燈明皿（第48・73図）などが出土している。また、第28次調査の表土・攪乱から、徳島大学病院の関連機関である厚仁会と記されたであろう戦後の硬質陶器（第73図-25）が出土している。
(三阪)

文献

古田昇, 1996. 徳島県吉野川・鮎喰川下流域平野の沖積層の形成過程. 立命館地理学8, 61-72.

古田昇, 2005. 多様性をもつ中央構造線沿いの徳島平野. 平野の環境歴史学. 古今書院, 東京, pp. 209-246.

北條芳隆 (編), 1998. 庄・蔵本遺跡1: 徳島大学蔵本キャンパスにおける発掘調査, 徳島大学埋蔵文化財調査報告書第1巻. 徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島.

近藤玲 (編), 2014. 南蔵本遺跡: 県立中央病院改築事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書第1分冊, 徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第84集. 徳島県埋蔵文化財センター, 徳島.

工楽善通, 1991. 水田の考古学. 東京大学出版会, 東京.

中村豊, 2000a. 阿波地域における弥生時代前期の土器編年. 田崎博之 (編), 突帯文と遠賀川. 土器持寄会論文集刊行会, 愛媛, pp. 471-497.

中村豊, 2000b. 庄・蔵本遺跡発掘調査概要: 新中央診療棟建設に伴う埋蔵文化財調査. 徳島大学施設委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島.

中村豊, 2002a. 縄文から弥生へ. 徳島考古学論集刊行会 (編), 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会, 徳島, pp. 245-258.

- 中村豊, 2002b. 前期末・中期初頭の諸問題: 徳島地域. 第16回古代学協会四国支部研究大会事務局(編), 第16回古代学協会四国支部研究大会発表要旨集: 弥生時代前期末・中期初頭の動態. 古代学協会四国支部, 愛媛, pp. 75-98.
- 中村豊, 2009. 医療系総合実験研究棟Ⅱ期改修に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室年報1, 1-10.
- 中村豊(編), 2010. 庄(庄・蔵本)遺跡: 徳島大学蔵本団地体育館器具庫・医学部臨床講義棟建設に伴う発掘調査報告書, 体育館建設に伴う発掘調査報告書補遺. 徳島県教育委員会・国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島.
- 中村豊(編), 2011. 庄(庄・蔵本)遺跡: 徳島大学蔵本団地課外活動共用施設・医療技術短期大学建設に伴う発掘調査報告書, 弓道場建設に伴う立会調査報告書. 徳島県教育委員会・国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島.
- 定森秀夫・中村豊(編), 2005. 庄(庄・蔵本)遺跡: 徳島大学蔵本団地体育館建設に伴う発掘調査報告書. 徳島県教育委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島.
- 佐々木由香, 2014. 縄文人が利用した球根類. 工藤雄一郎・国立歴史民俗博物館(編), ここまでわかった! 縄文人の植物利用. 新泉社, 東京, pp. 34-37.
- 田崎博之, 2002. 日本列島の水田稲作: 紀元前1千年紀の水田遺構からの検討. 東アジアと日本の考古学Ⅳ: 生業. 同成社, 東京, pp. 73-117.